

子規、新聞記者になる! その1

ジャーナリスト子規

子規の仕事はなあに?

子規の仕事は新聞記者です。25才の時、日本新聞社に入りました。そして「日本」という新聞で、俳句や短歌を募集したり、小説や紀行文などを書いたりしました。

どうして新聞記者になったの?

子規は文章を書く仕事で成功したいと思っていました。そこで、日本新聞社の社長をしていた陸羯南に「入社させてほしい」と相談しました。羯南は、子規のおじ・加藤拓川の友達です。子規が上京した時からお世話になっていました。

子規の才能をみとめていた羯南は入社を許し、子規は日本新聞社で働くことになったのです。

子規は羯南のことをとても尊敬していて、親せきへの手紙にも「もっとたくさんの給料をもらったとしても、ほかの新聞社で働く気はない」という気持ちでいることを書いています。

子規の仕事は新聞記者だったんだね。



▲新聞「日本」



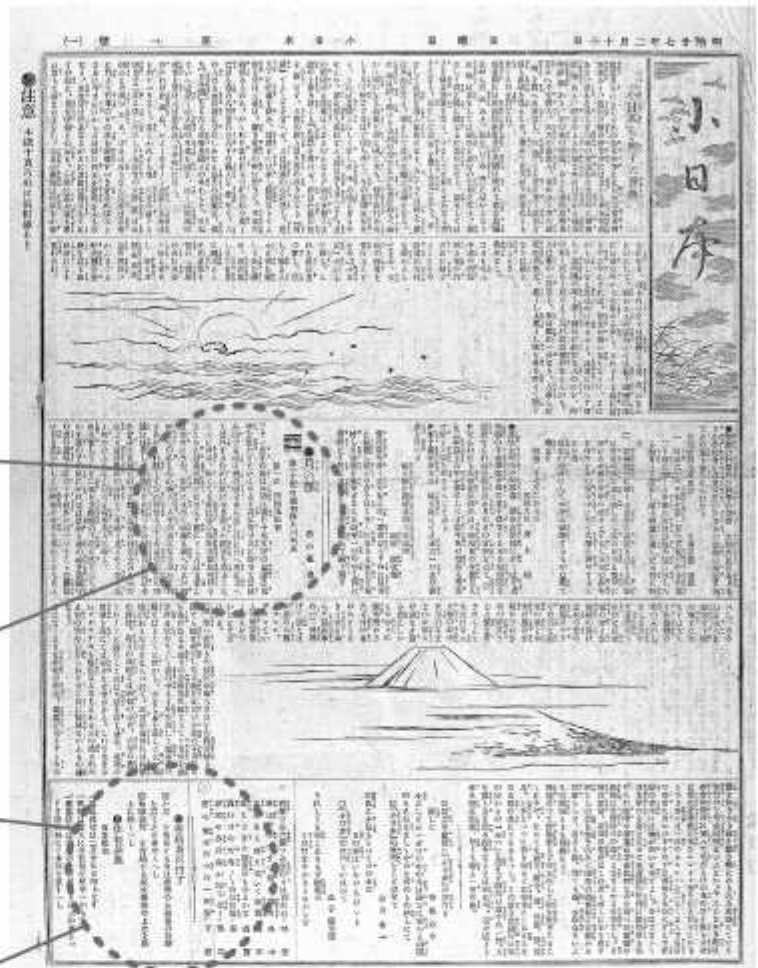
くが かつなん
陸 羯南 (1857~1907)

子規が働いていた日本新聞社の社長。病気の子規を、仕事でも生活でも支えました。

編集長として大活躍

明治27年(1894年)、日本新聞社は「小日本」という家庭向けの新聞を作ることになりました。その編集長は子規でした。

子規は編集の仕事に打ちこみました。また、この新聞で小説を連載したり、紀行文を発表したり、俳句を募集したりしました。



▲これは、子規が編集長をつとめた新聞「小日本」の写真です。3段目に、子規の小説「月の都」をのせています。1番下の段には、俳句をのせ、その募集もしています。

子規と画家・中村不折

子規は、「小日本」にさし絵を入れたいと考え、画家をさがしていました。そして知り合いの画家・浅井忠に中村不折を紹介してもらいました。不折は西洋の絵を勉強していました。

子規と不折は、日本の絵と西洋の絵のちがいについて話し合いました。子規は西洋の絵に、見たまを描く「写生」という方法があることを知りました。そしてこの写生という方法を、子規は俳句の作り方に取り入れていったのです。



なかむら ふせつ
中村不折 (1866~1943)

画家。さし絵や風景画を描きました。また、書家としても活躍しました。



▲「小日本」にのった中村不折の絵